

概 要 報 告

実施期日	8月2日(火)
部会名	中学校 音楽部会

テーマ 『日本の伝統音楽に触れながら、構成を工夫して音楽を作ろう～篠笛を用いた創作～』

提案概要

学習指導要領では思考力・判断力・表現力の育成が求められている。「創作」は生徒が音のつながりを試しながら短い旋律を作る活動であるため、思考力を育成するために有効な学習活動だと考えられる。しかし、記譜まで行くと授業時間が長くなりすぎることや、記譜が苦手な生徒にとっては、より苦手意識を高めてしまう可能性もある。限られた授業時数の中で、苦手意識を感じることなく創作の授業に取り組むためにはどうしたら良いのかを考えながら今回の研究を行った。

市内中学校の「創作」の研究授業を参観した中で見つけた成果や課題を元に、篠笛を用いた創作活動を行うことにした。題材の目標は「①創作に興味をもち、主体的に音楽を作る。②構成を知覚し、それらが生み出す特質や雰囲気を感じ、根拠をもって創作すること。」である。

今回の授業で工夫した点は3つある。まず1つ目は、『ペアワーク』である。題材の目標として掲げた「構成を知覚させる」という点で、ペアワークを取り入れることにより、繰り返しそれぞれの構成を練習することができた。また、全体の中では質問しにくい生徒も、ペアにすることにより生徒同士が教え合い、自然と学び合いの活動ができていた。しかし、ペアによっては進行に時間がかかってしまい、進度に差ができてしまった。今後は積極的に言葉かけをするなかで、時間差を少なくしていきたい。

2つ目は、『篠笛での創作活動』だ。篠笛の楽譜は漢数字で表されているため、五線譜と比較すると非常にシンプルで、音楽経験が少ない生徒でも取り組みやすかった。また、ワークシートに箏の楽譜のような枠を付けることにより、拍の過不足を避けることができた。しかし、いつも練習している曲なら吹けるが、初めての曲となるとなかなか音が出ず、苦勞している生徒がいた。2、3年生での創作につなげるためにも、毎時間取り組みを続け、篠笛の技能をさらに向上させていきたい。

3つ目は、『3年間の創作活動を見通して構成を用いたこと』だ。1年生の創作活動は今回が初めてだったため、誰もが取り組みやすい内容を心がけて学習指導要領の中の共通事項である構成に注目した。構成を用いることにより、創作の技能が身についたことを実感し、生徒たちも「創作」の手ごたえを感じているようだった。しかし、今の時点では吹ける音が限られているため、構成の工夫が難しく、表現が乏しくなってしまった。2年生では吹ける音も増え、記譜も慣れてくるので、それを生かしてテーマを設定し、そのイメージに合った音やリズムを選ばせたい。また、3年生では、いくつかの構成を用いるとともに、日本音階を意識的に取り入れることで、2年生のときよりもイメージを膨らませ、音楽の要素である速度や音色まで工夫させたい。

今回の研究を通して、創作活動の大切さや面白さを改めて感じる事ができた。研究を始める前は、授業数が少ない中、どのように創作活動を扱えば良いのか、生徒たちにどのような力を育ませたいのかがはっきり見えていなかった。しかし、この研究を通じて、生徒たちの創造力の大きな可能性を感じ、授業の工夫をすることによって短い時間の中でも創作活動ができることに気付くことができた。今回の研究の中で感じた課題に向き合い、生徒たちが自分を表現できる活動として、これからも引き続き研究を進めていきたい。

質疑応答

特になし

研究協議概要

全体を4つの班に分け、班ごとに協議を行った。

【創作における学習意欲を高める指導の在り方とその評価】

1班：1年生『リズム創作』2年生『「運命」のモチーフを使った創作』3年生『自由創作』と3年間を見通して創作に取り組んでいる学校があった。創作は生徒たちが意欲的に取り組みやすいが、記譜をすると途端に手が止まってしまう。

その点で、和楽器は創作活動をしやすい。音符による記譜をすることなく、漢数字で創作を完結できるからだ。また、西洋音楽と日本音楽の2つの創作をすることは時間的に難しい。創作が生徒の意欲を高めることは確かなので、真似をさせたり、自由に表現したりした後に、記譜の勉強をすることで意欲も低下しにくくなるかもしれない。

評価については、ねらいを明確にすると評価しやすい。演奏ができなくても、その授業のねらいが達成できていればワークシートだけの見取りだけでも十分だと思う。

2班：楽譜を読むよりも、耳で聴いて覚える生徒が多い。それは、楽譜に親しみが無い生徒が多いからだろう。そのため、まず楽譜に親しませることが大切だと考える。それが音楽へのシャッターを下ろさせないことにもつながるはずだ。『リズムゲームで楽譜や音符に親しませる』『篠笛で百人一首の世界を表現してみる』などの創作を行っている学校もあった。ワークシートだけの活動に偏らず、楽器などの演奏技術にも力を入れていきたい。

評価については、各観点のねらいを細分化して明確にしていきたい。

3班：1年生『リズム創作』2年生『リズムの変化』3年生『旋律づくり』など、創作は簡単などころから始め、3年間を見通して指導することが大切である。そして、今回の実践の記譜の工夫のように、生徒全員が取り組めるように工夫することが重要だ。ルールをしっかりと作り、ルールの中で創作することにより、ねらいに沿った授業を展開することもできるだろう。また、先にイメージをもたせてから創作をさせることが大切だと思う。

評価については、記譜ができているか、どんなところを工夫して創作したかという2つの観点が必要だ。

4班：リズム譜を書く練習をしてから、ボディーパーカッションの創作をしている。リコーダーでの創作は楽典の定着がないと難しいと感じている。和楽器だと分かりやすいし、生徒たちも取り組みやすいのではないかと思った。

評価については、今回の実践の「反復・変化・対照を理解しているか」というようにねらいが明確であると、ワークシートの評価もしやすいと思った。また、3観点で評価されていたが、適切だと思う。しかし、曖昧にならないように、それぞれの観点の評価を1つに絞ることが必要だと感じた。

まとめ概要

今回の研究は、平成20年1月の中央教育審議会答申の音楽科の4つの改善の基本方針に即した内容だった。そのため、音楽の学習のねらいがしっかりとしていた。また、生徒たちが普段から親しんでいる篠笛を使って行われたので、生徒たちもスムーズに創作の授業に取り組めたのではないだろうか。記譜の壁というものはあったが、創作の楽しさを味わわせるために、生徒のためにできることを考え、工夫し、実践してきた。子どもが学びを深めるために、この作業はとても大切なことである。

今回の研究のように、日本の伝統音楽を日常的に取り入れることは、とても望ましいことだ。今後、社会はさらなるグローバル化が進んでいく。音楽では日本の音楽と世界の音楽を学ぶことにより、生徒たちは多様性を学ぶことができるだろう。不寛容の広がり懸念される現代社会においては、自分と違うこと、人との違いを受け入れられることがとても大切になってくる。多様性を知ること、互いに尊重し合える心情の育成は、音楽の授業でも積極的に行ってほしい。

授業時数が少ない中で、日本の伝統楽器と創作のどちらも満足できる時数を確保するのはとても難しい。しかし、今回の研究を通して、工夫次第で生徒たちに様々な経験をさせられることに改めて気付かされた。また、3年間にわたって計画的に実践していくことの大切さも学ぶことができた。今後も生徒たちが主体的に音楽を学び、音楽を楽しみたいと思えるような授業になるよう研究・研修を重ねてほしい。